

# ゲッターコラボ外伝一 蒼穹の死・黄昏の時一

野生のムジナは語彙力がない

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初めましての方は初めまして。

本作の作者、ムジナでございます。

本作は、アイアンサーガのゲッターロボコラボに触発されて、勢いそのまま作り上げた作品です。なので、アイサガらしいリアルな描写があるかという点、それはちよつと……という感じですよ。

注

・初見でも楽しめるように作ってはいますが、ムジナのその他の作品『ハゲメガネ暗殺計画』等を読んでいただけで、より一層お楽しみになれると存じます。

・本作には少しだけ……本コラボへの批判が含まれております。

それでも宜しいのであればどうぞ、ご覧下さいませ。

・タグにもある通り、本作にはアイアンサーガのプレイヤーである『指揮官』が登場します。指揮官のセリフは（ ）で表示されており、ただし（ ）内の言葉をそっくりそのまま言っているのではなく、あくまでもそのようなことを言っているという感じなので、後はご自身の口調に合わせてセルフで変換を行っていただけると幸いです。

# 目次

ゲッターコラボ外伝―蒼穹の死・黄昏の時―	1
負けた……	41

# ゲッターコロボ外伝―蒼穹の死・黄昏の時―

遡ること数日前……

西暦202X年11月某日

クリスマスまで残り1ヶ月を切ったその日……

機動戦隊アイアンサーガで更新が行われた。

今思えば……

それはアイサガ史上、2番目に最悪の更新だった。

その更新により、ダッチーが兼ねてより宣言していたゲッターロボとのコラボがスタート。新しい機体とパイロットのお披露目が行われ、そして、1番の醍醐味とまで呼べるコラボストーリーが公開された。

また、本コラボ以前にダッチーはマジンガーZとダンクーガのコラボを展開してお

り、その双方でアイサガオリジナルのコラボストーリーを製作していた。

ゲッターロボとのコラボは、先に公開された2つのコラボの、その後のお話として描かれており、それを見て本作の作者であるムジナは……

「は？」

思わず、台パンしそうになった。(台パンした)

今回のイベントで、ゲッターロボ1番のアレな要素である『ゲッター線』という明らかにアイサガに相応しくない『異物』が持ち込まれたのは明白である。

いや、それだけならまだいい

ダッチーはこれ以前にも、害悪ライマーやクソドリル裸眼とのコラボを展開し、それまでのリアル路線をことごとく裏切っていた。今更アイサガにゲッターが出てきたところで、そう驚きはしない。

ムジナは辟易としつつもイベントを進めてみた。

しかし、問題だったのは

その主役が、カーズだったということ

「なんなのですか!? このクソイベはア!?!」

ストーリーを読み進めて行くたびに、ムジナは心の底から込み上げてくる怒りを抑えられず、ついに大声を上げてしまった。

要約すると、そこに描かれていたのは、強化に強化を重ねてどういうわけか主人公っぽくなってしまったアイサガ界きつてのモブ、カーズの姿だった。

最終的にアスモデウスとかいうヤバイ機体に乗込み、そして無意味なほどに無双するということだったのだ。

しかし、果たしてそれに意味があったのだろうか？

ハッキリ言って、あんなモブ・オブ・モブのカーズ如きに、アスモデウスとかいう魔人シリーズを与える必要性があったのか？ そうしてまで、わざわざクソ雑魚いカーズを強くする必要はあったのだろうか？

……いや、ない！

というか、ああいうクソ雑魚パイロットにアスモデウスとかいう超有名な名前を冠した機体を使わせるのは如何なものなのだろうか？

やはり、強い機体はそれに相応しい、強い人物が使ってこそ吉というもの。それにも関わらず、モブ中のモブである『上方修正カーズ』に乗せるというのは、それは魔人シリーズのブランドを落とすことに繋がるのではないだろうか？

そもそも、別にカーズが主役である必要はない

活躍を与える必要もない

当然、無双要素を入れる必要もない

カーズに与える役割など……

せいぜい、散々使われた挙句捨てられる役で十分だ

(そう、ボロ雑巾のように！)

そして、カーズに追加されたよく分からない強キャラ設定、ブルーテイルとかいう人外ヒロイン、幼馴染との全くもつて不要なやりとり、そして(付け焼き刃の)努力を……それでも、まるでムジナの好みを狙い撃ちしたかのような理想的な主人公像であること

には変わらない。

だが、思い出してみしてほしい。

これはあくまでもゲッターロボとのコラボである。

つまりは、真の主人公になるべきはカーズではなくゲッターロボのキャラクターでなくてはならない筈なのだ！

（大人の事情的な意味で）

しかし、ストーリーでは序盤から終盤に至るまで、全編にわたって（正直、キツイくらい）カーズの主人公っぷりが描かれていた。

果たして、カーズの主人公化はわざわざコラボの中で描く必要があったのだろうか？  
これらを踏まえて改めて問わせて頂く、本コラボイベントにてカーズが主人公である必要性はあったのだろうか？

……いや、ない！（2回目）

また、コラボでの問題はカーズの事だけではなく、他の様々な点で挙げられていた。その理由は長くなるので後述するが、総じてこのシナリオはクソシナリオであるという結論に達した。

この、明らかなクソイベに対し……

しかし、世間からは肯定的な声が多く上がった。

コメントはカーズを絶賛するようなコメントで溢れた。「カーズ見直した」などといった正当な評価コメントから「大出世して人気急上昇!」という意味の分からないコメントを叫ぶカーズ中同然の者、そして「ベカスよりも主人公してる!」と言う者もいた他、「ダッチー最高かよ!」とクソイベに対してまさかの最大限の賛辞を送るスーパーイエスマンまで現れる始末。

(スーパーイエスマンニキよ、それは褒めすぎだ)

カーズを活躍させたいがために、ダッチーはいつたいいくら、カーズに無駄な投資をしたのだろうか?

そのイエスマンの群れに浸食されたコメント欄を前に、ムジナの批判コメントは低評価の嵐を喰らい、言論弾圧のごとく批判コメントは自然消滅してしまうのだった。(お

そらく)

だが、敢えて言わせてもらおうおう

カーズよ、お前はやり過ぎた

知っているか？ 目立ち過ぎたモブは死にやすい

(サイコロステーキ先輩並感)

知っているか？ 偶発的に大いなる力を手に入れた登場人物に待ち受けているのは

……破滅の未来だ

知っているか？ 貴様の強さは、所詮ダッチーの与えた補正によるものに過ぎないの

だということを

貴様は歪んでいる(それは言い過ぎ)

お前はモブのままでもいい

だからこそ、ムジナは決意した。

「そうだ！コラボイベントを爆破するのです！」

（京都に行くノリで）

コラボストーリーの存在を全てデリートすることで、アイサガでカーズがこれ以上活躍できない状況を作り出そう！……そう決意したムジナは、意気揚々と準備に取り掛かるのだった。

しかし、ダッチーへ真つ向からアンチ行為を行ってしまえば、ムジナはダッチーのイエスマンから一斉に批判を浴び、最悪警察沙汰にまで発展しかねない。いくらムジナが人間ではないといつても（タヌキです）捕まれば保健所行きで、殺処分は免れないだろう。

だが、コラボのたびにこのようなクソシナリオを作るダッチーの凶行を、これ以上許してはならない。数ヶ月前のハゲメガネの件と同様、命を賭してまでダッチーへのサボタージュを行う覚悟が、ムジナにはあった。

しかし、ムジナにはとある秘策があった。

犯罪にならず、コロボイベントをアイサガから抹消する方法が……

これは、ゲッターコロボが死ぬほど嫌だった……とある一匹のタヌキの物語

というわけでタイトル変更です。

機動戦隊リアルアイアンサーガ

『ダッチー批判—ムジナの提言—』

注・

この物語はフィクションです。

実在の人物、団体とは一切関係ありません。

そして、ムジナは再び過去に跳んだ。

ムジナは大きな丸い顔、くりくりとした丸い耳、つぶらな瞳、フサフサとした茶色の体毛、非常に柔らかい大きな丸い尻尾を持った、全長30センチ程度の『タヌキ型』B Mである。

しかし、ムジナは武装を一切持たず（強いて言えば鈍器になる尻尾くらい）フレーム効果及び専属能力すら何も無い、戦闘では全く役に立たないクソ機体だった。

ちなみに、C級機体に見えて実はA級機体であるのは生産数の少なさからくるプレミア的なもので、ランク自体に意味はない。

しかし、これらはいくまでも表向きの情報

ムジナには隠蔽された真のフレーム効果があつたのだ。

そう、それこそがタイムスリップ能力である。

この能力を駆使して、ムジナはコラボイベントが公開される前のダッチー本社へと潜入……サーバー上にアップされたものからバックアップに至る、全てのコラボシナリオを削除しゲッターコラボのサボタージュを試みた。

因みに、ムジナがこの能力を使うのはこれが3回目である。

1度目は偶発的なもので、2度目はハゲヤクザをアイサガから抹消する為に使用した。(詳しくは、ムジナの著作である『ハゲメガネ暗殺計画』を参照して下さい)

過去、ハゲメガネが実装される前の日のダッチー本社へ潜入し、サーバー上のハゲメガネに関するあらゆる情報を削除しようとした試みは結果的に失敗するも……有事の際に備えて開発室にリスポーン地点を設定しておいたので、3度目となる今回は容易に潜入が可能だった。

中国―杭州市―

(ダッチー本社、開発室)

(また……?)

開発室へと降り立ったムジナは、そこで待ち構えていた指揮官と遭遇した。前回のハゲマガネ暗殺計画の際も、こうして指揮官の待ち伏せを受けて暗殺は失敗に終わっていた。

「くっ……やはり簡単にはいかないですか……」

そう言つてムジナはEMP爆弾を構えた。

指揮官の基地から勝手に持ち出してきたものだった。

EMP爆弾はただの爆弾ではない。爆発すると電磁パルスが放出され、人に一切の傷を負わせることなく、効果範囲内にある全ての電子機器に対してダメージを与えるというものだった。

「内部でこれを爆発させ、明日の更新作業を妨害します」

ムジナは血走った目つきで爆弾を高く掲げた。

（待つて）

指揮官は、落ち着いた様子でそれを止めようとする。

（前にも言つたけどさ、それをやったらアイサガできなくなるけど、いいの？）

「はい！ ムジナはそれで構わないのです！」

（ええ……）

きつぱりと言いい放つムジナに、指揮官は少しだけ驚いていると、ムジナは爆弾の安全

ピンに手をかけた。

「流石のムジナも、今回のシナリオは許せないのです！ だからこそ、この私……ムジナ・イシユメールが肅清するのです！」

（せめて、理由くらい聞かせて？）

激昂した様子の子のムジナに、指揮官は落ち着いた様子で説得を試みた。

「……ぬう、分かったのです」

ムジナは頭に青筋を浮かべながらも、指揮官の言葉に従って両手のEMP爆弾をゆくりと下ろした。

（それで、何を怒っているの？ 前回のダンクーガの時とは違って、今回はムジナの嫌いなマフィアお……）

「ヤクザ！」

「ヤクザ！」

（……ヤクザさんは……）

「さん付けする必要はないのです！」

（……ヤクザは、出てこなかった筈だけど？）

そんなに正式名称を使うのが嫌なのか、ムジナは指揮官の言葉にいちいち反応して、その度に指揮官に言葉を改めさせた。

「そうですね、確かに今回のコロボでハゲメガネは出てきませんでした。はい、それは本

イベントで唯一の評価ポイントだったと思うのです」

(唯一って……じゃあ、どうして?)

「それは……」

ムジナはポツリポツリと理由を話し始めた。

「アイサガから、アイサガらしさが失われたからです」

(と言うと?)

「指揮官様は、アイサガの1番の魅力ってなんだと思われませんか? カッコいいメカ?

迫力のあるバトル? 個性豊かなキャラクターたち? そんな彼らによつて織り成さ

れる重厚感のあるストーリー?

もしくは可愛いキャラクターたち?……とまあ、色々あると思いますが」

(うん、色々あるよね)

「はい。それで……ムジナにとって、アイサガの1番の魅力は『リアリティ溢れる描写』

にあると思っています」

ムジナは指揮官の前をウロウロしつつ、続ける。

「ストーリー序盤のアフリカでの砂埃っぽさを感じさせる激闘、内部に色々な問題を抱えたババール連盟の情勢、陰謀渦巻く日ノ丸、チュゼールにおける血生臭い内乱……などの細かな設定。そう言った設定や舞台を背景に、実弾とビームが交錯する戦場に

て、戦争という命をかけたやりとりが絶えず繰り返される。それだけではなく、戦友、大切な人の死、価値観、生き様、正義と悪……アイサガの世界に生きる人々の、様々な思惑が交錯する描かれ方はとてもリアリティーがあり、ムジナのにもとても魅力的なものでした」

（うん、そうだね）

「そして、スロカイ様を始めとする一部の人のみが扱うことのできる特殊能力の存在。リアルをベースに、ユーモアそして少しのミステリアスという名のスパイスが振りかけられた、無骨でありながら奥行きのある物語……アイサガで描かれているのは、本来そう言った調子のストーリーでした」

ムジナは小さく息を吐き、言葉を続ける。

「サービス開始当初からアイサガをやっているムジナですが、アイサガがただのキャラゲーならこんなに続いていなかったのです。因みに、ムジナはキャラゲーと化したスマホ版スパロボは1ヶ月も経たないうちに引退しており、それほどに、ムジナはこのアイサガという世界と、それらを背景に展開されるリアリテイ溢れる描写に心底惚れ込んでいました」

（そうなんだ……）

「そうなのです。ですが、最近のアイサガはどうですか？」

ムジナは手元のEMP爆弾を強く握った。

「ダンガイオーやゼオライマーとかいう、アイサガの世界線に合わない外来種が出てきたかと思えば、いつしか怪獣が出現し始め、極め付けがゲッターコラボによる大怪獣バトル！そして非科学的なロボトプロレス！はいクソーーーーーー！」

そう言つてムジナは鈍器と化した尻尾を振り回して開発室のデスクに打ち付け、台パンし始めた。

「いいですか？今のアイサガは、元のアイサガからは比べ物にならないほどにファンタジー化してしまっています。今まで目を瞑ってききましたが、もう限界です。私は、こんなファンタジーをやるためにアイサガを始めたんじゃない。それはただのスパロボだ！二番煎じだ！ムジナはスパロボをやるためにアイサガを始めたんじゃないのです！」

ムジナの攻撃を受け、デスクが破壊されていく

「最早、アイサガは死にました。かつてアイサガにはスパロボにはない（これでもかというほどの）『リアル』があり、それがアイサガの魅力でもありました。しかし、いくつかのコラボを経て、ダッチーはそれまで築き上げてきたアイサガの魅力を、自分で殺して

しまったと言わざるを得ないのではないのでしょうか？」

ダッチー、お前のせいだ

ダッチー、お前のせいだ

ダッチー、お前のせいだ

ムジナは尚もデスクに尻尾を叩きつける。

まるで、アイサガを悪い方向へ変化させてしまったダッチーに対して、積もりに積もった怒りをぶつけるかのように……

「そして別世界からセイレーンみたいな変態コスプレイヤー（笑）まで出てくる始末……何の脈絡もなく、唐突にそーいう存在を出すくらいだったら、最初からそういう設定にして欲しいのですが？ まあ、無理でしょうね……所詮、後付け設定なのですから」

開発室のデスクは完全に破壊されてしまった。

「しかし、そんな後付け設定をすることは、アイサガが何年もかけて積み上げてきた『リアリティ』を捨てることよりも、重要なことだったのでしょうか？ ムジナの惚れた、初期のサーガを返してください……ああ、そうですか。ムジナの惚れたアイサガはもうないんですね……そうですか」

そう言つて、ムジナは再びEMP爆弾の安全ピンに手をかけた。

「じゃあ、壊すしかないのです」

(待つて)

「止めないで下さい指揮官様！ これ以上、ダッチーの暴走を許してはいけません！ これ以上、アイサガの素晴らしいリアルな世界観をダッチーに壊されるくらいなら、ダッチーのスパロボ信仰に汚染される前に、ここで全てを壊してしまつた方が遙かにマシなのです！」

(でも、それだけじゃないんでしょ?)

指揮官の放つた言葉に、今まさに爆弾の安全ピンを外そうとしていたムジナの手がピタリと止まつた。

「はい……ムジナのダッチーに対する恨み辛みはまだまだあるのです！ 特に、ソロモンの描き方……！」

(ソロモンの鍵?)

「そうです！」

ムジナは数回にわたつて大きく頷いた。

「ソロモンの元ネタはイルミナティであると聞いた事があります」

イルミナティとは、

イエズス会の修道士であるアダム・ヴァイスハウプトによつて1776年に設立された秘密結社であり、ドイツ南部とオーストリアにおいて一斉を風靡し、バイエルンにて

発展したとされている怪しげな政治組織である。(wikiより)

(確か、あのフリーメイソンを裏で操っているとされているんだっけ)

「そうです！　つまり、アイサガ内においてソロモンとは秘密結社であると言えるのです。その証拠に、ソロモンの秘密結社っぷりはアイサガ本編の冒頭でも描かれており、バアルのテストやアフリカでの暗躍など、怪しげな感じがまた、アイサガのリアルな世界観に良いテストを与えてくれているような感じでした」

(他にも、チュゼールでも秘密裏に十二巨神の捜索を行っていたり、グレートブリテンの王政にも一枚噛んでいるそうだからね……)

「ええ。世界を裏で支配し、暗躍する巨大組織……何とロマンに溢れた設定なのでしようか！」

しかし、そこまで上機嫌に話していたムジナは急に眉を潜め……

「……で、ここ最近のソロモンは何なんですかね？」

(えつと、何かあったっけ?)

不機嫌そうなムジナに、指揮官が尋ねると

「何かって……アイツら、マシンガでもダンプクレーガでもゲッターでも、コラボ先のキャラと馴れ馴れしくお友達ごっこしてるんですよ！　そして秘密結社の癖に、一緒に世界の平和を守りますよ的なムーブかましちやってよお！　アンタら秘密結社なんだから

積極的に前に出ちやダメでしょーが！」

(あー……)

「描くならもつと、裏で何をしているのか分からない、陰謀を感じさせるようなムーブをするべきでした。しかし本コラボ……いえ、マジンガーZから全面的に正義の味方っぽく描かれてしまったため、秘密結社としてのダーク&amp; a m p ; ミステリアスな雰囲気は激減してしまっているのです！ 台無しなのです！」

尚もムジナの批判は続く……

「秘密結社なら、そこはコラボ機体と共に世界を守る的なムーブをするのではなく、コラボ相手たちと敵対してその技術力の強奪を企むとか、そういう風なのが良かったと思います。」

当然、ソロモン如きが性能ぶつ壊れのマジンガー乙やダソクーガに勝てるはずもないので、強さもよく分からないクソダサイ怪獣と戦わせるよりも、その方が、コラボ機体であるマジンガーやゲッターの強さを引き立てることができるのではないかと思いましたが。やるからには、ソロモンには徹底的に秘密結社としての立ち回りをして欲しかったです。

しかも、隠匿されるべきソロモンの存在が一般市民であるハゲメガネにも知られてしまっているんですよ？ この時点で最早、秘密結社とは？ と問いたくなるような感じ

になつてしまつているのです!」

ムジナはそこで肩をすくめてみせた。

「ハツ……ダッチーは今回、あまりにもソロモンのことについて描き過ぎました。それにより、まだ公開すべきではなかったソロモン本部の場所（オーストラリア）まで明らかにしてしまいました。まあ、これに関してはありますがとうございました。ククク……お陰で、ソロモン関係者全員が殺害される『ソロモン撲滅イベント』が書けそうなのです」（なんか、穏やかじゃないね……）

「そんなストーリーを構想してしまうほど、ムジナは怒り心頭なのです! ああ、ついでにカーズも殺します! かのオルガ・イツカと同じように、名前すらないヒットマン（3名）に蜂の巣にされて……」

（それはちよつと、許可できないかな……）

「そうです! カーズです!」

そこでムジナはハツとしたように顔を上げた。

「最近のカーズにはすつごくイライラとさせられるのです。あのクソ雑魚が、つい最近までモブだった奴が、あんな大出世を果たすことは許せないのです……チョーシに乗りやがつて! モブはモブのままでも良かったのに、本来の主人公であるはずのベカスよりも活躍しちゃつてよお……ケツ」

ムジナはいつものキャラを捨てて悪態を吐きはじめた。

「あー、つまんねー！ カーズとかいう興味ねえ野郎の活躍を見せられるこっちの身にもなつてくれつての……オマケにアスモデウスに乗りやがって、ぶっちゃけカズ公がそんなに活躍したのはダッチー補正があつたからだよね？ 大して強くない癖にしゃあしやあとでしゃばりやがって……はいクソ」

カーズに対して罵詈雑言を展開するムジナ、それに対して指揮官はムジナのことを宥めるでもなく黙って見つめていた。

(ん……)

「指揮官様、何か言いたいことでも？」

仲間への罵倒に対して、指揮官から何かしらの反論があると想定していたムジナは、怪訝そうな顔で指揮官の言葉を待っていると……

(とは言いつつもさ)

「……なんですか？」

(本当はカーズのこと、そんなに嫌ってないんじゃない?)

「……っ!？」

指揮官の言葉に、ムジナは一瞬だけ顔を引きつらせた。

「何を根拠にそんなことを……?」

(だって、ムジナはアイアンサーガのキャラクター1人1人に対して、真摯に向き合っている人だから……)

「真摯に向き合う? ムジナがですか?」

そこで、ムジナは小さくため息を吐いた。

「それはあり得ないのです。ムジナは心の狭い生き物なのです、アイサガ内においてカーズと同様に嫌っているキャラは沢山います。指揮官様のように、全ての人を愛することができるほどの器量は……」

(じゃあこの前、ウツドに対する酷い扱いに怒っていたのはどうして?)

「……っ!」

それは今から数ヶ月前……

アイサガ内でバレンタインイベントが開始された時のことだった。その際に実装されたストーリーにおいて、ハゲヤクザことマフィアにより、ウツドが虐げられるという事件が起こった。

これに激怒したムジナは、ダッチーとハゲヤクザを激しく批判。タイムトラベルを決

意し、ハゲヤクザの実装を阻止するために過去のダッチー本社へと跳んでいた。

それが2回目のタイムスリップのあらすじだった。

(詳しくは『ハゲメガネ暗殺計画』を(参照下さい)

「それは……」

言葉に詰まるムジナを、指揮官は穏やかに見つめた。

(努力が好きだって、ムジナはそう言っていた)

指揮官の言葉に、ムジナはびくりと反応する。

(カーズだって、努力をしていたよ。確かに、彼はベカスのように強いわけじゃない。ましてやスロカイ様のように何か特別な能力があるわけでもない。でも……強くなって、弱くても、せめて自分にできる精一杯のことをやろうって、必死に努力していたよ)

指揮官はさらに言葉を続ける……

(彼の今回の活躍も、アスモデウスへの搭乗も、ダッチーの補正があつたからじゃなくて、全ては彼の積み重ねてきた努力の賜物だと考えることはできないかな?)

「……………」

それに対し、ムジナは深いため息を吐き……

「知っているのです。ムジナは、カーズへの偏見が詰まった色眼鏡をかけた状態です

トリーを讀んではいましたが……彼の熱意と努力には、素直に脱帽していました」（やっぱり……ちゃんと、見ているんだね）

「まあ、アイアンサーガの二次創作を書かせている者としては当然のことなのです。最も、読解力はそんなにありませんけどね……」

その言葉に、指揮官は安堵の表情を浮かべた。

（あの時のムジナの言葉に、嘘偽りが無いのだとしたら……一体、何がムジナをそんなにまで駆り立てたの？）

「……流石ですね」

ムジナは再びため息を吐くと、観念したように続けた。

「そうです。アイサガがコロボし過ぎてスパロボ化しているという点も、カーズが活躍し過ぎている点も……全てムジナにとって面白くない問題点ではありましたが、そこまです嫌っているわけではないというのが本音なのです」

ただし、ソロモンの描き方については擁護できないことを指揮官に示し、ムジナは続ける……

「特にスパロボの件は、今に始まったことではないですし……正直、ゼオライマーが始まった時点ダッチーがいつかスパロボをやらかすというのは薄々感づいていたので、今ここでヤケを起こしたところで何を今更という感じではありませんね。まあ、本来のリア

ルを追求したアイサガが失われたのは寂しいではありませんけど……」  
(じゃあ、どうして?)

「それは……」

ムジナは少しの沈黙の後、意を決したように告げた。

「不用意に宇宙へ進出したからなのです」

(どういうこと?)

ムジナの言葉に、指揮官は思わず眉を潜めた。

「いいですか！ アイサガの世界において、軌道エレベーターの存在等は物語の中で言及されているものの、それ以外で宇宙開発関連の話が殆ど表に出ていないことから……現状、何かしらの理由(恐らく巨神戦争)によりアイサガ世界の宇宙開発は廃れ、宇宙への進出が難しくなっているとムジナは解釈しました」

あくまでも1つの解釈であることをハッキリ示した後、ムジナは続けた。(異論がありましたら、是非コメント欄へお願いします)

「しかし、メインである陸上戦から戦場が宇宙に進出するのは王道的な展開ではありません。アイサガがスパロボに憧れていることを考慮すると、いずれアイサガのバトル

フィールドが、地上から宇宙へと移行するのはムジナにとっても想定済みのことでした」

そこで、ムジナは指揮官の目をジッと見つめた。

「それまで重力にとらわれていた世界の住人たちが、その枠を超えて新たなる世界である宇宙へと進出する……これがどれだけ重いシチュエーションなのか分かっていきますか？」

（なるほど、つまり……アイサガ世界における宇宙進出っていう大役を、最初にカーズに担わせたのが、ムジナは気に入らないということ？）

「そのような些少な問題ではないのです！」

ムジナは興奮したように拳を握りしめた。

「かつて地球が誕生してから間も無くの頃……酸性の海の中で誕生した生物にとって、大気というものは猛毒でした。しかし、やがて生物はその毒を克服し、陸上へと進出するようになり、膨大な数の進化を繰り返し、そして今の生態系が作られています。それは人間が宇宙へ進出することも同じではないでしょうか？」

そう述べながら、握った拳を目の前まで掲げた。

「生物が海中から陸上へと進出したことと同様に、宇宙進出は人類の……いえ、この地球に生まれ落ちた種としての革新を意味します！」

(なるほど。かつて陸上が生物にとつて猛毒(死)の世界だったのと同様に、人類にとつて真空の宇宙は未知の世界であり、生物の生きられない死の空間……共通しているね) 「はい。ですから先に述べたように、アイサガ世界の宇宙産業が衰退していると仮定した場合……そのノウハウはゼロから新しく築き上げていく必要があります。なので宇宙への進出はもつと慎重に、度重なる実験、データ収集、分析等……様々な過程を経て描くべきでした」

しかしながら……

敵が宇宙に出てきた!

じゃあ、こつちも宇宙行こう!

丁度よく宇宙でも動かせるBM(アスモデウス)あるやんけ

よし、行つたれ!

「……とまあ、コラボの中ではこんな感じでサクサクと話を進めちゃったものですから、

アイサガ界初の宇宙進出はロマンもクソもない……あまりにも都合良すぎな茶番になつてしまふのです」

また、地球から月までの片道分のエネルギーは？

（推進剤絶対足りないよね？　なるほど、古代機だからヴオワチュールリユミエールみたいなものでも張れるのか？）

一瞬で片道38万キロメートルの距離を移動できる時点で最早意味不明。空気抵抗がない宇宙空間とはいえ、アイサガ世界ではあまりにもオーバースペック

（ゲッターは月面まで到達するのに3日を要した。↑いくらゲッターとは言つても3日間もぶっ通しで戦えるとは到底思えないことから。アスモはそれに一瞬で追いついて戦闘？　なるほどね！　そこは古代機の力つてことね！）

注記

『機動戦士ガンダム 逆襲のシヤア』では、月の静止衛星軌道にいた連邦軍のMSがわりとすぐに地球へ到達していた（ゲタを使って、片道）。

ただし、これは宇宙航行に関するノウハウを持つガンダム世界の連邦軍だからこそできたのであって、古代機とはいえ陸戦主体のアイサガ世界の機体では……しかも単機で……？

## 改定

文章を改めて読んでみた限りでは、どうやらブルーテイルのテレポート(?)を使つて戦場に出現したとも取れる描写があり……

↓それで移動できるなら最初からそうしろよ

(というかテレポートてまた都合良すぎ……)

パイロットの安全性は?

(空気の問題もあるが、そもそも乗っただけで廃人になる機体から、いくら調整したとはいえ長時間降りることのできない状況でカーズが生きて帰つて来れる時点でナンセンス!)

それよりも、カーズがアスモデウスへの搭乗に耐えることのできた理由は? これに關してはたつた数ヶ月程度の努力では補いきれない(どうせ主人公補正)

そもそも無重力下でのロクな訓練すら受けてないパイロット(所詮、カーズ)が行つて、すぐに戦闘できると思えますか? 姿勢制御の為のAMBACとか出来ないだろ!(なるほどね! そこは古代機に秘められた能力で、パイロットが宇宙での戦闘に速攻で適応したとか……?)

いやいやいやいや!

おいコラクソダッチー、何でもかんでも「古代機だからできる」と「主人公補正」で済まそうとするんじゃないやねえ！ 考えるのを放棄するんじゃないやねえぞ……（例えスパロボ脳だったとしてもいけない）

だとしても、カーズの件は無理です。

（こればかりは、いくらカーズが努力を行なっていたとしても擁護できません。宇宙空間の戦闘である以上、そもそも努力のしようがないので）

いや、分かりませんね

古代機やそのスペックなど、公開されている情報があまりにも少ないため、これ以上の考察はムジナには無理です。（そもそまムジナには語彙力もなければ読解力もないので……）

説明不足ですみません……

ただ、（スパロボ脳に染まった）ダッチーが「こうすれば盛り上がるんじゃないやね？」という浅かな考えで物語を作っている感じは否めないというのをお分かりいただきたい。

（それまでに培ってきた『リアル』を悉く無視して）

つまり、何が言いたいかというと……

つまりダッチーが本コラボで描いたアイサガ初の宇宙進出は、スパロボ脳に染まったダッチーの『自己満足』とカーズを目立たせたいがための『ダッチー補正』と『ご都合主義』を最大限に発揮したものである。

そして今後プレイアブル化されるアスモデウスの『ガチャ回転率』を上げる為の演出に過ぎないということなのです！（遅しいな！）

「……と、いうわけなのです！」

一通り指揮官に説明し、ムジナは額を拭った。

（うーん？）

それに対して指揮官は微妙な表情を浮かべた。

それを見かねたムジナは指揮官へと微笑みかけ……

「いいですよ、分からなくても……無理に理解しようとしなくても」

ムジナはそこで背伸びをした後に、こう続けた。

「ただ……この宇宙進出には、アイアンサーガ特有のリアルもなければ、カーズの努力も

全く活かされていない！ 本イベントは、その全てが古代機特有のガバガバ設定とご都合主義に頼った、ダッチーの自己満足と主人公補正の塊と言っても過言ではないのです」

これが……ムジナがゲッターロボコロボをクソシナリオと呼ぶ所以なのです！（もし、何か異論や指摘があるのなら受け付けます、是非コメント欄へ！）

（まあ、言いたいことは大体分かったよ）

指揮官はため息を吐き、ムジナを見つめた。

「そもそも、やはり宇宙への一番乗りがカーズってのはちよつと……ねえ？ いくら彼が努力を積んだと言っても、そこはやはり納得がいかないのです……」

（あはは……そこはやっぱり嫌なんだ？）

「当たり前じゃないですか！ やはり、一般人が仕方なくに宇宙へ行くんじゃないかって……こういう偉業を成し遂げるのは、名実共に『選ばれし者』が良かったなあ……」

（じゃあ、誰だったら良いの？）

指揮官がそう聞くと、ムジナはぎくりと震えた。

「え……それ、聞いちゃいます？」

（一応、参考までにね。やっぱりベカスとか、それともスロカイ様とか？）

「あー……それはですね」

ムジナは少し考えた後、ゆつくりと……宇宙へ行くのに相応しいと思っっている人物の名前を告げるべく、口を開けた。

「あなたです、指揮官様」

（え？）

突然、名指しで呼ばれて指揮官は困惑した。

（なんで、自分が？）

「そりや……自分の仕える主人には常に高みを目指して欲しいと思うのは家臣としての本望です。まあ、ムジナから見て指揮官様は、人類を代表して宇宙へ行くに相応しい人物であるからに決まっているでしょう？　なのです！」

（人類を代表って、別にそんなことは……）

「何を言っているのですか？　世界各地のBMを収集し『剣聖』を始めとする、世界に名

高い猛者たちを抱える我が軍は、今や世界最強と呼んでも過言ではありません。そして、それを作り上げたのは他ならぬ指揮官様ではないですか!」

(それは、そうかもしれないけど……)

「さらに日ノ丸やグレートブリテン、機械教廷、ヴァルハラなど、世界各国の要人から絶大な信頼を受け、時に身分の垣根を超えて彼らを従えることのできる……このような人物は、指揮官を置いて他に類を見ないのは明白なのです! それに、指揮官様は老若男女問わずいろんな方々から好かれておりますからね!」

ムジナのベタ褒めに、ただ普通に傭兵業を営んでいたつもりの指揮官は、素直に喜んで良いのか分からず頬をかいた。

「今や世界は貴方様の動向に注目しております……そこで、ムジナから1つご提案が!」  
(えつと……何かな?)

「今度、宇宙へ遊びに行くなんてどうでしょう?」

(ええ……)

遊びに行く……という軽い言葉とは裏腹に、その背後に隠れたスケールの大きさに、指揮官は首を傾げた。

「はいなのです！ カーズとかいうモブにできて我々にできないことなんてないので。アホなダッチーが不用意に宇宙を解禁したこれを境に、我々も宇宙進出すべきなのです！ そして、世界中に見せつけてやるのです！」

（えっと、具体的にどうするのか？）

「うーん、そうですねえ……宇宙へは指揮官様お一人で行っても構いませんし……勿論、指揮官様のお好きな方をお誘い頂いて宇宙デートをするつてもアリだと思います。ああ、他にも大勢の方を連れてクリスマスの時みたく楽しくパーティーをするのもアリかとー！」

ムジナは指揮官めがけて手を振った。

「というわけで、指揮官様。リクエストお待ちしているのです！一緒に宇宙へ行きたい人がいるのなら、是非コメントへどうぞー！」

（まあ、考えておくよ……）

「あ、そうそう……ブルーテイルは参加者に含まれますが、どうあがいてもカーズは含まれません。もう十分に活躍したでしょ？なので今後あのモブは一生出禁なのです」

（カーズ涙目……）

ピー、ピー

その時、指揮官の持っていた通信機が鳴った。

『指揮官ー、今どこ?』

指揮官が通信機を取ると、スピーカーから女性の声が聞こえてきた。指揮官は少しだけ言葉を選んだ後、返事をするべく通信機を通話状態にした。

(シエロン? どうしたの?)

『今日の約束……覚えてるよね?』

(勿論、覚えてる)

『じゃあ、遅れないですよ? 今日には月に一度の映画鑑賞会なんだから……指揮官がいな

いと始められないんだからね?』

(先に始めてもいいのに?)

『指揮官がいなかつまんない……それに、せっかくこの私がポップコーンなりジュースなり用意してあげたんだからね! みんなはもう来てるから遅れないですよ! 絶対

に、絶対にだからね!』

(分かった……それじゃあ)

指揮官は小さく笑って通信を終えた。

それを見て、ムジナはブンブンと尻尾を振った。

「映画なのですか? いいですね!」

(一緒に来る?)

「是非！ ……と、言いたいところですが……ムジナはこの後他にやらないといけないことがありまして、御誘い頂きありがとうございます（ごぎいます）」

（そっか、気が向いたらいつでも来てね？）

「はいなのです！ それじゃあ、帰りましょうか」

そう言つてムジナは指揮官の手にそつとEMP爆弾を握らせると、スタスタと開発室の出口へと歩いて行つた。

（これはいいの？）

「はいなのです！ 指揮官様に話したら、なんだかスッキリしたので」

チヨロいなあ……

手の中のEMP爆弾へ視線を落としてそんなことを思いつつ、指揮官はムジナの姿を追つてその場を後にした。

かくして、ムジナの計画は失敗に終わった。

しかし……

「やっぱり、カーズのごことは気に入らないのです！」

ムジナの衝動は未だ治らなかつた。

カーズに対して制裁を加えるべく、ムジナは……

「そうだ！　カーズを防衛単機で編成するのです！」

かつてハゲメガネにやったように、ムジナはアリーナの防衛をあえてクソザコBMに乗せたカーズ単機でやることで、彼が撃墜されたことを知らせる防衛失敗の通知を見て、憂さ晴らしをしようと考えていた。（防衛失敗で喜ぶのは、恐らくこのタヌキぐらいしかないだろう）

「ならばさっそく……編成編成と……」

現代に戻ってスマホを開き、パイロット一覧をスクロールするムジナだったが、どこまでスクロールしても、カーズの特徴的なダサイバンダナはいつまで経っても見えてこ

なかった。

「あれ？　そういえばカーズってどこに置いてたっけ？」

練度の高い最上部から、1ミリも育てていない最下層まで一通り確認を終え、カーズの姿がどこにも見当たらないことを確認すると……そこで、あることに気づいたムジナは、慌てて図鑑の方からパイロット一覧を確認し……そして

「あれ……？　ムジナは、もしかしてカーズのことスカウトしていなかったのです？」

驚くべきことに、アイサガほぼ初期勢であるはずのムジナは、カーズのことをスカウトしてすらいなかったのだ……（実話）

おわり

負けた……

はい、どうもムジナ（略）です。

なんか変なタイトルだなあと思われたその貴方、正解です。

前回……というかゲッターコラボ外伝（笑）のあとがきです。

あとがきと言っても言うことは1つしかないのです、さっそく本題に入らせていただきます。（走り書きなので誤字脱字があるとは思いますが、御用じやを。ほら間違えた、ご容赦を！）

前回、ムジナは『カーズをスカウトしていない』って言ったじゃないですか。ああ、見ている方や内容を覚えていない方は、1つ前の話に戻っていただいて、序盤中盤の茶番劇は無視して一気に下までスクロールしていただいて、終盤の接待編成でカーズをボコボコにしてやろうっていう所を見て下さい。

まあ、結局……カーズ持っていないなかつたので接待編成は未遂に終わったのですが、その後もカーズをスカウトする気にはならず、ずっと放置していたのです。ぶっちゃけカーズのこと嫌いなので一生スカウトしてやらねーって思っていたのですが……

まさか、ダッチーがあのような方法でムジナにカーズをスカウトさせようとしてくるとは、思いもありませんでした。

何が言いたいかというと、クレーンです。

アイサガの期間限定ミニゲーム、クレーンゲームの商品になんとカーズがラインナップされているではありませんか！……ええ、他の人はどうか知りませんが、一巡目の1つ目でこれ見よがしにカーズが流れてくるのです。

これを見て、ムジナは絶叫しました。

しかも、クレーンゲームの商品は出ている商品を全てコンプリートしないと商品の更新ができない仕様になっているのです。つまり、その後の豪華なクレーンの商品を得るためには、ムジナはカーズを引くしか方法がないということなのです。

これ、明らかにムジナ対策ですよ？

前々からそんな感じはあったものの、ダッチーの関係者がムジナの作品を読んでいる可能性が微レ存なのです！

というわけで、ムジナは負けました。

4月11日現在、まだカーズを引いていませんが、それ以上にダイヤ500とかガチャ券とか他の商品が気になるので、まあ間も無く引くことになるでしょう。

はい、言いたいことはそれだけです

ご視聴ありがとうございます。

それでは、また……

と、言いたいところなのですが、投稿のための文字数がやや足りないのもう少しだけ……

最近、崑崙研究所から『飛行機もどき』（名前忘れた）とかいう新型BMが出たじゃないですか。ムジナはですね、あれが崑崙製なのがどうもしっくり来なくてですね……

というのも、リアルではクソ雑魚戦闘機しか持つてない癖にそんな作れる技術力ないだろっ……！ って言いたくてですね、むしろ現実ではイーグルやラプターなどと言った数多くの傑作戦闘機を生み出してきた国を母体とする、ゼネラルエンジン製だったらまだ分かるのですが……ねえ？

これに関して、軍団メンバーと話し合った結果……  
お国事情ということは理解しました。

なんというかですね、国の歴史や文化に影響されて、本当に作りたいたものを作れないというのは本当に悲しいなって、そう思いました。せつかくいい味出してるのに、勿体ない……そして不遇なゼネラル

ただし、これだけは言わせて頂きたい。

鼻肩するのはいいが、あからさますぎる

そして、過度な美化はやめろ

兵士の扱いについて、私たちが全く知らないとも思いましたか？

現実と妄想のギャップが、笑わせてくれる

ほら、ムジナは前にどこかで言ったじゃないですか。

組織が大きくなればなるほど、統制が難しくなる。

教廷でシンシアがスロカイのことを暗殺しようとしていたように、内部では様々な私利私欲が介在するようになり、一枚岩ではなくなる……組織に所属している全てが、同じ『正義』を持っている訳ではなくなる。と……何が言いたいかというと、いや、今更

いう必要ありませんね。ダッチー、みんな気づいている。

まあ、クレームはここまで

最後に、1つだけ……例の飛行機もどきと同時期に追加された戦闘機たちに関してです。

——飛行機があんな機動できるか！——

いくらハリアーみたいなブイトール持ってたとしても、横に行ったり前に行ったり後ろに行ったり……リアルに存在する機体なんだから、そこはちゃんとしろ。

というか、これが見下ろし型ゲームの限界ですね。

あれでは飛行機もどきの、飛行能力を一ミリも生かせられない。飛んでいるって設定ではあっても、結局は地面の付近でプカプカしているだけなのです。いつまでこんな虫かごの中でカブトムシを戦わせるようなゲームを続ける気ですか？（陸戦機や戦闘ヘリ系だけならそれでもまだ良かったんですよ？　ですが、リアルな戦闘機を入れるのはちよつと……）

なので、アイサガ2ではちゃんとそこら辺も考えて作って欲しいですね。

ということは、3Dゲーム化ですね。はい、頑張ってください！

けなしてばかりなので偶には評価を……

コラボイベントで実装された『乳・あはん』……じゃなくて『ニューアーハン』について、アニメーションの立体的な機動と躍動感が凄くて正直鳥肌立った。お見事です。でも、見下ろし型ゲームなので見てるこつちからすると地上をウロウロと動き回って、ニューアーハン本来の魅力は半減かなと……

ああ、それと最後に……ダッチーが見ていることを想定して、アイサガを面白くさせるための提案をしたいと思います。

まず1つ目、『軍事委託』システムの導入要はアズレンや艦これの遠征と同じ感じで、部隊を出して放置して、時間がくればいくらかの資源が貰えると……とくにコインに関してはいくらあっても足りないのです、導入してくれると嬉しいです。また、委託に出した機体とパイロットは編成も出撃も出来なくなりますが、その代わりに委託完了時に経験値を貰えるという……つまり、使っていないキャラでも放置で育成出来るという、是非、ご検討いただければ！

4月12日追記

遠征あるやんけ。でも思ってたのと違う……

2つ目、『母艦』システムの導入

指揮官が運用する巨大船で、部隊の機体を運ぶ役割を担う

母艦ボーンナスにより、出撃時に部隊のHPや攻撃力にバフが加わる他、艦砲射撃や支援機を出撃させることよる、部隊への戦術支援も可能というものです。（艦砲射撃の照準はプレイヤーが合わせる）

ストーリーモードや外伝のみで使用可能で、アリーナ系では不可

最初は大型トレーラーから始めて、陸上艦船、果てにはフィールドを回ってカケラを集めて空母や空中戦艦を運用できるというロマン、これにより、ただ戦場の風景を眺めるだけだった今のアイサガとは違い、プレイヤーをよりアイサガの世界にのめり込ませることができる、自分もアイサガの世界を生きるひとりのキャラクターとすることができるという利点があります。1つ目の提案共々、是非ご検討いただければ幸いです。

ダッチーが見ていければの話ですが……

